「国語国文学研究」第四十九号　抜刷
平成二十六年三月六日　発行

『菅家後集』所載「哭奥州藤使君」の構成論考

焼山廣志

『菅家後集』所載「哭奥州藤使君」の構成論考

焼山廣志

一

『菅家後集』所載の「486　哭奥州藤使君　九月二十二日、四十韻」は五言八十句古詩のスタイルで、「敍意一百韻」に次ぐ長編の作品である。題注にもあるように、道真五十七歳時、太宰府左遷の当該年の秋、九月二十二日に詠まれたとある。その内容は、人の呪詛を受けて亡くなったと伝え聞く旧友の陸奥守藤原滋実（しげざね）の死を京都からの家族の手紙とそれを太宰の謫居に届けに来た使者より知り、その死を悼み、さらに今の我が身を鑑み、ともにこの世の非情を嘆く心情が、鬼気迫る筆致で貫かれている。太宰府での道真の心情の変遷を知るうえで注視すべき作品である。この詩については、既に注釈書(1)を公にした。又、その作品内容より窺えることを「総括」の形で、前稿(2)で提起してみた。しかしながら紙頁の制限があり、その中で十分意を尽くすことが出来なかった恨みがあり、今稿は、再度、全文を取り挙げ、構成論に視点を置き、更に考察を深めることが大きな意図である。

具体的には、前稿(2)で提起したことを踏まえて、改めてここに整理し考察を深める。

それは本詩の第七十九句・八十句にある「拙詞四百言／以代使君誄（拙詞四百言／以て使君の誄に代へん）」の句内容の意味するもの、とりわけ「誄」の使い方に注視する必要がある点。そしてここから本詩の構成の仕方の糸口が見える点の二点である。

二

まず「誄」の使い方についての考察を再度以下に整理してみる。

道真は、第七十九句・八十句で（「五言四十韻」の古詩でもって、「誄」の代用をした）と詠む。その「誄」とは、「㈠死者の生前の功績をたたえ、その死を悼む」と、又「㈡しのびごと。死者を哀悼する文章」のことであるが、前稿で提起したように、

ここでの使われ方は、「誄」を死者を追悼する文章「しのびごと」の漢訳語としてではなく、古代中国本来の「誄」の文体を指していると考える。

井上和歌子氏の論文（「『空也誄』考―文体、成立の指示、評価―」）（「和漢比較文学」一号）に次のような言及がある。

漢文の誄は「――誄井序」、即ち散文の序と韻文の誄の二部で構成される誄は、四字句で押韻する頌で綴るのが通例であった。（中略）誄について、より詳細な説明は『文心雕龍』等の文体論に見える。（中略）この誄に関する文体論は、以下の五点に纏められる。（中略）⑤記述の方法。伝のスタイルで記述し、頌の文を用い、生前の徳を誉め、そして死を悲しむ。称える事と哀悼する事が両立する記述が必要である。（中略）死者の徳行を伝によって記述し、更に哀悼の詞を述べ、かつ声に出して朗読されることが誄に求められたのである。」

ここで、この「哭奥州藤使君」の詩に目を移す。井上氏の言及する「誄」の文体とどう関連するのか、又この詩の構成とどう関わるのか、全八〇句を便宜上八句ずつ十段落に分け考察を進める。

三

【一段】

原文	訓読文
1 家書告君喪	家書　君が喪しことを告ぐ
2 約略寄行李	約略　行李に寄す
3 病源不可醫	病源　醫すべからず
4 被人厭魅死	人に厭魅せられて死す
5 曾經共侍中	曾経　共に侍中たりき
6 了知心表裏	了知す　心の表裏
7 雖有過直失	過直の失有りと雖も
8 矯曲孰相比	矯曲　孰か相比せん

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その一）

妻からの藤原滋実の死を告げる家書が届き、太宰に派遣された使者より、その死に至るまでのいきさつがつかめた。それは病気や事故によるものではなく、呪詛によるものであることが判明する。その想定外の友の死に、道真は言葉を失う。と同時に、滋実の生前の在りし姿が道真の脳裏にありありと甦ってくる。この【一段】では、滋実と自分との関わりの契機、そして滋実の顕著な性格、（それは正直過ぎて一本気な所はあるが、

とにかく不正に対してつゆとも妥協しない潔白さがあったこと）をまずこの【一段】で特記する。

【二段】

原文	訓読文
9 東涯第一州	東涯の第一州
10 分憂為刺史	憂ひを分けて刺史たり
11 盈口含氷雪	口に盈たして氷雪を含み
12 繞身帯弦矢	身に繞らして弦矢を帯ぶ
13 僚屬銅臭多	僚屬銅臭多し
14 鏁人煎骨髓	人を鏁して骨髓を煎る
15 土風絶布悪	土風布の悪しきを絶ち
16 殷勤貢細美	殷勤に細美なるを貢む

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その二）

【二段】では【一段】の内容を受けて、藤原滋実の陸奥の国守としての功績及びこの徳行を具体的に記す。

十一句・十二句の「口に盈たして氷雪を含み／身に繞らして弦矢を帯ぶ」の句意は、先の注釈書(1)の中で須藤修一氏が具体的に考察しているように(3)、滋実の奥州国守としての実直な仕事ぶりを活写している内容にとどまらず、滋実の性格そのもの、つまり、「口に巧言なく実直、誠実で、わが身を持すことには厳しく、自他ともに不正を容赦しなかったこと」を高く評価している点に注視すべきである。その対極として、悪に染まった汚職まみれの人間や社会風潮を次の段から次々に暴露していく。

【三段】

原文	訓読文
17 兼金又重裘	兼金又重裘
18 鷹馬相共市	鷹馬相共に市ふ
19 市得於何處	何れの處にか市ふこと得たる
20 多是出邊鄙	多くは是れ邊鄙より出でたり
21 邊鄙最獷俗	邊鄙最も獷俗にして
22 爲性皆狼子	爲性皆狼子なり
23 價直甚蚩眩	價直甚しく蚩眩す
24 弊衣朱與紫	弊衣朱と紫とにす

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その三）

この【三段】では【二段】を受けて、藤原滋実の人となりと対極に位置する、人間や社会風潮を具体的に列記する。ここでは京の法秩序や文化の及ばぬ陸奥の住民の野卑さ、横暴さを記

す。これはこの詩の先に制作されたと思われる「敍意一百韻」の太宰の地の野卑さを記す箇所、「苦味の塩、木を焼き／邪贏の布錢に當つ／殺傷軽しく手を下し／羣盜穏やかに肩を差す／魚袋出して釣を垂れ／屏篁絃を叩くに換ふ／貪婪販米を興し／行濫官綿として貢す／鮑肆方に息を遺し／琴聲未だ絃を改めず」（七十一句～八十句【八段】）の口吻と酷似する。

【四段】

原文	訓読文
25 分寸背平商	分寸も平商に背けば
26 野心勃然起	野心勃然として起る
27 自古夷民變	古より夷民の變は
28 交關成不軌	交関　不軌を成す
29 邂逅當無事	邂逅して事無きに當りては
30 兼贏如意指	兼ねて贏すること意指の如し
31 惣領走京都	惣領して京都へ走り
32 豫前顔色喜	豫め前むれば顔色喜ぶ

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その四）

この【四段】では、紛争の絶えない事由が陸奥の住民の性格に拠ることを記す。それは裏をかえせば、このような地に勇んで赴き、統治しようとした、滋実の多大の労苦と尽力を、改めて読み手に想起させる内容となっている。そして後半より、こうした住民を利用し、わが私欲を肥すために、やっきになっている、汚職まみれの受領たちとその悪事に便乗する京の小役人どもの悪事を赤裸々に活写していく。

【五段】

原文	訓読文
33 便是買官者	便ち是れ官を買ひし者
34 秩不知年幾	秩、年幾ばくなるかを知らず
35 有司記暦注	有司　暦注を記す
36 細書三四紙	細書すること三四紙
37 歸来連座席	歸り来たらば座席に連なり
38 公堂偸眼視	公堂　眼を偸みて視る
39 欲酬他日費	他日の費に酬いんと欲し
40 求利失綱紀	利を求めて綱紀を失ふ

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その五）

この【五段】では【四段】を受けて汚職まみれのあくどい受領と京都にいる官僚たちの癒着ぶりが、赤裸々に詠まれている。潔癖さにおいて誰よりも己れに厳しかった滋実が、こうした小

役人の犠牲になってしまった憤りを暗示する句内容となっている。三十五句・三十六句の「有司　暦注を記す／細書すること三四紙」三十七句・三十八句の「歸り来たらば座席に連なり／公堂眼を偸みて視る」という表現内容は余りに具体的で、そこには道真の過去に見聞した国司時代の実体験が投影されていると考えるしかないような、迫力がある。

【六段】

原文	訓読文
41 官長有剛腸	官長　剛腸有らば
42 不能不切齒	齒を切らざること能はず
43 定應明糺察	定めて應に糺察を明かにすべし
44 屈彼無廉恥	彼の廉恥無きを屈す
45 盗人憎主人	盗人は主人を憎む
46 致死識所以	死を致して所以を識る
47 精靈入冥漠	精靈冥漠に入りて
48 不由見容止	容止を見るに由あらず

▼〔藤原滋実の陸奥での国守としての功績・徳行〕（その六）

この【六段】では【五段】の受領と京都在住の役人との癒着とは対照的な、滋実の筋金入りの潔白さで、物事を押し進めて来たこのことが、却って悪人どもの恨みをかうことになり、命を落とすことになった無念さを、強い憤りをもって詠い上げる。そこには、太宰府左遷に到る我が身の顚末と重なるものからくる心情が込められている。

【七段】

原文	訓読文
49 骸骨作灰塵	骸骨　灰塵と作り
50 無處傳音旨	音旨を傳ふるに處無し
51 葬來十五旬	葬りてより來のかた十五旬
52 程去三千里	程は去ること三千里
53 廻環多日月	廻環す　多くの日月
54 重複幾山水	重複す　幾山水ぞ
55 憶昔相別離	憶ふ昔　相ひ別離せしとき
56 寧知獨傷毀	寧ぞ知らむ　獨り傷毀せらるるを。

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕（その一）

この【七段】より、今まで滋実が死に至るまでのいきさつの推測から、既に死去しあの世に旅立った滋実の死を惜しみ悼む心情を詠むものに変わる。

死者である滋実と生者である自分自身とが二人だけで真摯に対峙し、赤裸々な心情を吐露する内容が展開されて行く。

【八段】

原文	訓読文
57 君聞泉壤入	君は聞かに泉壤に入り
58 我劇泥沙委	我は劇しく泥沙に委す
59 天西與地下	天の西と地の下と
60 隨聞爲哭始	聞くに隨ひて哭の始めと爲す
61 哭罷想平生	哭すること罷みて平生を想ふに
62 一言遺在耳	一言遺りて耳に在り
63 曰吾被陰德	曰く　吾　陰德を被りて
64 死生將報爾	死生　將に爾に報いんとすと。

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕（その二）

【七段】に続き、死者の滋実と生者である自身との一対一の対峙がなされている。滋実の東北の地での無念の死と西府の太宰の地で謫居生活を余儀なくされ、生きる屍となりつつある自身を「泉壤」「泥砂」と対比させる。そして、かつて道真に語った滋実の言葉を想い起こす。そこには、「敍意一百韻」の中においても、「秋夜」の中でも繰り返し詠まれている「絶望的な孤独」の心情が、亡き友滋実に対して初めて心を開くかのように、自分の今の心情を語りかけようとするのは他ならぬ、「滋実」が「死者」（あの世の人間）であることに因る。つまり、この世での絶望があの世での光であって欲しい切なる願いが込められているのではないか。

【九段】

原文	訓読文
65 惟魂而有靈	惟れ魂にして靈有らば
66 莫忘舊知己	舊き知己を忘るること莫かれ
67 唯要持本性	唯だ要ず本性を持して
68 終無所傾倚	終に傾倚する所無からしめよ
69 君瞰我凶慝	君　我が凶慝を瞰ば
70 擊我如神鬼	我を擊つこと神鬼の如くせよ
71 君察我無辜	君　我が辜無きを察せば
72 爲我請冥理	我が爲に冥理に請へ

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕（その三）

【八段】を受けこの【九段】は亡き友滋実に、より具体的に

今の心情を、激情がほとばしるように、声高に詠み上げる。今生きている人間に働きかける術を持たぬ道真にとって、又、生きている人間が自分の無実を晴らし、京に呼び戻してくれる気配の全くない絶望感の中で、今、道真がすがりたいのは、「公正な神」の存在であり「天の神による公正な裁き」である。そしてそれを滋実に必死に訴え願うのは、その「自分」と「天の神」との仲立ちの役目である。滋実が「死者」であるからこそ頼める願いである。私が「無実」であるか否か、公正なる天の神が存在するならば、必ず白黒をはっきりさせてくれるはずだ。自分に疾しさがあるのであれば、命を落とすことも辞さない。もし無実であるならば、天下の者にそのことを明らかにして欲しいと叫喚する。裏を返せば「無実」が晴れないのは、「天の神」の不在に他ならないことを言う。これは須藤修一氏の論ずる(3)【白氏文集】「哭孔戡」(4)の中にある、優れた友「孔戡」を失くしたことに対し白居易が、天の神に訴える二十五句から三十二句「賢者の生民を爲むる／生死懸って天に在り／天　人を愛せずと謂はば／胡爲れぞ其の賢を生ず／天　果して人を愛すと爲さば／胡爲れぞ其の年を奪ふ／茫茫たる元化の中／誰か此の如き権を執る」の句内容、つまり「天命はだれが握っているのか」という切なる問い掛けが、投影されていると見て間違いないと思う。

【十段】

	原文	訓読文
73	冥理遂無決	冥理　遂に決すること無くんば
74	自茲長已矣	茲れより長く已みなん
75	言之涙千行	言えば涙千行
76	生路今如此	生路　今此のごとし
77	聞之腸九轉	聞けば腸九轉す
78	幽途復何似	幽途復た何似ん
79	拙詞四百言	拙詞四百言
80	以代使君誄	以て使君の誄に代へん

▼〔人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼〕（その四）

そして【九段】を受け、七十三・七十四句の「冥理　遂に決すること無くんば／茲れより長く已みなん」の句意が前述した白詩「哭孔戡」(4)の三十一句・三十二句「茫茫たる元化の中／誰か此の如き権を執る」の内容と表裏をなしていることが判明する。白居易が直接的に天の神の「在」「不在」を問い掛けるのに対し、道真は一歩ひかえた婉曲的な表現に徹しているは、道真の今の置かれている立場の不安定さを暗示する。その揺れる心情が、最後の句へと一気に流れて行く。そして君を悼む気持

ちを、本来ならば「誄」の文体で綴るべきだったのだが、その自分の心情は、この五言古詩というスタイルでしか、言い尽せなかったと、この一文を止めるのである。

四

以上、全八十句を便宜上、八句ずつ十段落に分けて概略を述べてきた。ここで改めて各段落とのつながりを考察してみる。すると、前述の井上氏の「誄」の言及に、この道真の詩を充てて考察すれば、この作品の構成が上手く説明できるように思う。

つまり、

▼［一段・二段・三段・四段・五段・六段］　【徳行】

↓（藤原滋実の陸奥の国守としての功績・徳行）

▼［七段・八段・九段・十段］　【哀悼】

↓（藤原滋実が人々の呪詛により命を落としたその死を悲しむ）

「前半」で藤原滋実の生前の徳を誉め、「後半」でその死を悲しむという、井上氏の言及する「称える事と哀悼する事が両立する記述」になっていることが明らかになる。

そして、次に、考えなければならない事はなぜ、道真が、この詩を古代中国で制作されてきた「誄」の文体を意識し、それに倣った構成にしつつも、「誄」ではなく、「誄」に代わる「五言古詩」のスタイルにしたのかということである。

私論だが、道真自身が、この「五言古詩」こそが、我が心情を吐露できる最も意を得た作詩スタイルであると考えていたからではないか、と私は考える。その根拠は以下のようなものである。

井上氏が言及するように、「誄」ならば、「四字句」を押韻する「頌」で綴るのが通例であったこと。又、「嗚呼哀哉」という四字の哀悼の定型句を用いなければならないという制約があるのに比して、古詩にはそうした制約が全くない点、そして何よりも「五言古詩」へのこだわりが道真自身にあったことを物語っていると考える。それは、筆者が、百韻という大作「敍意一百韻」が五言排律であったこと。そして、この大作のあとにこの「哭奥州藤使君」が詠まれたと考えるからである。つまり、「敍意一百韻」と「哭奥州藤使君」は当時の道真の心情を窺える「表裏一体」の大作ではないかと分析しているからである。

【注】

(1)「哭奥州藤使君」他一編（『菅家後集』）全注釈（二）
　　焼山廣志監修「道真梅の会」編　大洋印刷　平成二十五年一月

(2)菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十五）
　国語国文学研究（熊本大学　文学部）第四十八号　平成二十五年二月

(3)「総括考察①」486　哭奥州藤使君」に投影された『白氏文集』の一考察　須藤修一〔「哭奥州藤使君」他一編（『菅家後集』）全注釈（二）〕

(4)『白氏文集』「0003　哭孔戡」を以下に引用する。

0003　哭孔戡

洛陽誰不死　洛陽誰か死せざらむ
戡死聞長安　戡が死　長安に聞ゆ
我是知戡者　我は是れ戡を知る者
聞之涕泫然　之を聞いて涕泫然たり
戡佐山東軍　戡は山東軍の佐たり
非義不可干　義に非ずんば干（もと）むべからず
拂衣向西来　衣を拂ひ西に向って来る
其道直如絃　其の道　直（なお）きこと絃の如し
從事得如此　事に從ひ此の如きを得るは
人人以爲難　人　人以て難しと爲す
人言明明代　人は言ふ明明の代
合置在朝端　合（まさ）に置いて朝端に在らしむべし
或望居諫司　或は諫司に居かんことを望む
有事戡必言　事有らば戡必ず言はんと。
或望居憲府　或は憲府に居かんことを望む
有邪戡必彈　邪有らば戡必ず彈（ただ）さんと。
惜哉両不諧　惜しいかな。両（ふた）つながら諧（かな）はず。
没齒爲閑官　齒（よはひ）を没（をは）るまで閑官たり。
竟不得一日　竟（つひ）に一日も
謇謇立君前　謇謇（けんけん）として君前に立つを得ず。
形骸從衆人　形骸衆人に從ひ
斂葬北邙山　北邙山に斂葬（れんそう）す
平生剛腸内　平生　剛腸の内
直氣歸其間　直氣其の間に歸す
賢者爲生民　賢者の生民を爲（をさ）むる
生死懸在天　生死懸って天に在り
謂天不愛人　天　人を愛せずと謂はば
胡爲生其賢　胡爲（なんす）れぞ其の賢を生ず。
爲天果愛人　天　果して人を愛すと爲さば
胡爲奪其年　胡爲（なんす）れぞ其の年を奪ふ。
茫茫元化中　茫茫たる元化の中
誰執如此権　誰か此の如き権を執る。

（本文は朱金城箋校『白居易集箋校』〔上海古籍出版社〕に拠る）。
（訓は続国訳漢文大成『白楽天詩集』に概ね従う。）

（原文中の傍線は、道真の詩に引かれている詩句）
（原文中の点線は、道真の詩内容に間接的な投影が窺える詩句）

この詩の大意は次のようなものである。

私（白居易）は孔戡の死を聞いてそぞろに涙を流した。孔戡はかって山東の節度府（地方長官の役所）で掌書記（文書係）であったとき、従史（小役人）の不正を深しとせず、病気を理由に官職を中途で辞して、洛陽に帰ってきた。その道（生き方）の真っ直ぐなことは弓弦のようで、少しも曲がったところはない。その後、二つの要職の話があったが、惜しいかな、二つとも叶わないで閑職にいて一生を終えた。そのため平生の剛気も空しく地に帰してしまった。天が万民を愛するものだとするのならば、何故に孔戡の寿命を奪ったのであろうか。天命は、一体だれが握っているのだろうか。　（続国訳漢文大成『白楽天詩集』）

（やきやま　ひろし／
大学院文学研究科第七回修了／有明高専）